

平成28年度に係る業務の実績に関する評価結果  
国立大学法人奈良先端科学技術大学院大学

## 1 全体評価

奈良先端科学技術大学院大学は、先端科学技術の基盤となる情報科学、バイオサイエンス及び物質創成科学の3分野に係る研究の深化と融合を推進するとともに、優れた研究成果に基づく高度な教育により人材を育成し、もって科学技術の進歩と社会の発展に貢献することを目的としている。第3期中期目標期間においては、奈良先端科学技術大学院大学の創設の趣旨及びミッションに基づき、国際競争力を一層強化するとともに、科学技術の大きな変化と新たな社会的要請に応えるために、教育研究体制を改組し、情報科学、バイオサイエンス及び物質創成科学の融合性を高め、先端科学技術研究の新たな展開を先導する国際的な教育研究拠点としての地位を確立することを基本的な目標としている。

この目標達成に向け、学長のリーダーシップの下、情報科学、バイオサイエンス及び物質創成科学の研究領域並びにこれらの融合領域において先進的な研究を推進しているほか、海外留学等を通じて学生の国際的な視野の育成に取り組むなど、「法人の基本的な目標」に沿って計画的に取り組んでいることが認められる。

### （「戦略性が高く意欲的な目標・計画」の取組状況について）

第3期中期目標期間における「戦略性が高く意欲的な目標・計画」について、平成28年度は主に以下の取組を実施し、法人の機能強化に向けて積極的に取り組んでいる。

○ 優秀な留学生の確保に向けて、日本学生支援機構主催の日本留学フェア（タイ、ベトナム、マレーシア）等に参加するなどの取組を実施しており、5名の国費留学生の入学決定を実現している。また、インド、インドネシア、タイ、ベトナム、フィリピン、マレーシアの学術交流協定校において、教育プログラムや研究の内容、インターンシップや留学生活について紹介する学生対象の大学説明会を開催するなどの取組を実施し、留学生特別推薦選抜により40名の出願があり、うち38名の外国人留学生を受け入れている。

（ユニット「先端科学技術を担うグローバルリーダー育成のための世界水準の大学院大学の構築」に関する取組）

○ アジア地域における教育研究連携の拠点として、ボゴール農科大学（インドネシア）の同窓会館内にインドネシアオフィスを設置するとともに、海外オフィスが東南アジアの協定校や本学修了生との教育研究連携の拠点となることをインドネシアの大学関係者等に示すため、ボゴールでキックオフシンポジウムを開催（参加者約100名）するなど、修了生やその出身大学との連携の強化に取り組んでいる。また、第2の海外教育連携拠点として、カセサート大学（タイ）工学部キャンパス内にタイオフィスを設置している。

（ユニット「研究大学としての国際的地位の確立」に関する取組）

## 2 項目別評価

## &lt;評価結果の概況&gt;

	特 筆	一定の 注目事項	順 調	おおむね 順調	遅れ	重大な 改善事項
(1) 業務運営の改善及び効率化			○			
(2) 財務内容の改善			○			
(3) 自己点検・評価及び情報提供			○			
(4) その他業務運営			○			

## I. 業務運営・財務内容等の状況

## (1) 業務運営の改善及び効率化に関する目標

①組織運営の改善 ②教育研究組織の見直し ③事務等の効率化・合理化

【評定】 中期計画の達成に向けて順調に進んでいる

(理由) 年度計画の記載15事項全てが「年度計画を上回って実施している」又は「年度計画を十分に実施している」と認められること等を総合的に勘案したことによる。

## (2) 財務内容の改善に関する目標

①外部研究資金、寄附金その他の自己収入の増加 ②経費の抑制 ③資産の運用管理の改善

【評定】 中期計画の達成に向けて順調に進んでいる

(理由) 年度計画の記載4事項全てが「年度計画を上回って実施している」又は「年度計画を十分に実施している」と認められること等を総合的に勘案したことによる。

## (3) 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標

①評価の充実 ②情報公開や情報発信等の推進

【評定】 中期計画の達成に向けて順調に進んでいる

(理由) 年度計画の記載2事項全てが「年度計画を十分に実施している」と認められるとともに、下記の状況等を総合的に勘案したことによる。

平成28年度の実績のうち、下記の事項が注目される。

#### ○ オープンキャンパスの充実による地域への情報発信

大学の研究・教育について地域の理解を得るための取組として、オープンキャンパスを実施しており、スマートフォン対応のウェブサイトを通じて情報を発信しているほか、太陽光によって電気を発生させる仕組みを学習するソーラーカーレースや紫外線によって硬化する化学反応を利用したものづくりプログラム等、親子で科学技術に親しめるような体験型プログラム・デモを行うなどの取組を実施した結果、参加者は過去最高の11,131名（対前年度比2,217名増）となっている。

#### （４）その他業務運営に関する重要目標

---

①施設設備の整備・活用等 ②安全管理 ③法令遵守等 ④その他の重要目標

##### 【評定】 中期計画の達成に向けて順調に進んでいる

（理由） 年度計画の記載15事項全てが「年度計画を上回って実施している」又は「年度計画を十分に実施している」と認められるとともに、平成27年度評価及び第2期中期目標期間評価において評価委員会が指摘した課題について改善に向けた取組が実施されていること等を総合的に勘案したことによる。

## Ⅱ. 教育研究等の質の向上の状況

平成28年度の実績のうち、下記の事項が注目される。

### ○ 特色のある分野での研究の推進

情報科学、バイオサイエンス及び物質創成科学の研究領域並びにこれらの融合領域において先進的な研究を推進した結果、年度計画に掲げた目標である350件を上回る399件の論文を国際誌等で発表している。加えて、国際学会においては155件の発表を行っている。

### ○ 学生の国際的な視野の育成の促進

学生の国際的な視野の育成及び英語力向上のため、日本学生支援機構海外留学支援制度等の各種経済支援を活用し、年度計画に掲げた目標である45名を上回る60名の学生に、海外留学を通じて英語研修、ラボステイ及び共同研究等を経験させるとともに、単位を修得させている。

### ○ グローバル環境の構築等を目的とした会議における日英同時通訳の実施

世界から多様な背景を持つ研究者を受け入れ、共に教育研究を行うグローバルな環境の構築に向け、外国人研究者等の利便性を高めるとともに構成員としての帰属意識を醸成させることを目的に、情報科学研究科教授会（年14回程度開催）及び教授懇談会（年10回程度開催）において、会議資料の日英併記に加え、会議室に通訳ブースを設置して日英同時通訳を実施している。この取組により、将来構想や大学運営に関する研究者間の共通理解を深めるとともに、外国人研究者からは海外の大学における取組事例等について情報提供が行われ、大学のグローバル化に寄与している。